

寺田寅彦

自画像



自
画
像

四月の始めに山本鼎やまもとかなえ氏著「油絵のスケッチ」という本を読んで急に自分も油絵がやってみたくなった。去年の暮れに病気にして以来は、ほとんど毎日朝から晩まで床の中で書物ばかり読んでいたが、だんだん暖かくなって庭の花壇の草花が芽を吹き出して来ると、いつまでも床の中ばかりにもぐっているのが急にいやになった。同時に頭のぐあいも寒い時分とは調子が違って来て、あまり長く読書している根気がなくなった。今までは内側へ内側へと向いていた心の目が急に外のほうへ向くと、そこ

には冬の眠りからさめて一時に活気づいた自然界が勇み立って自分を迎えてくれるような気がした。ちようどそこへ山本氏の著書が現われて自分の手をとって引き立てるのであった。

中学時代に少しばかり油絵をかいてみた事はある。図画の先生に頼んで東京の飯田いいだとかいううちから道具や絵の具を取り寄せてもらって、先生から借りたお手本を一生懸命に模写した。カンバスなどは使わず、黄色いポール紙に自分で膠にかわを引いてそれにビチューメンで下図の明暗を塗り分けてかかるといいうやり方であった。かなり

たくさんかいたが実物写生という事はついにやらずにしまった。そして他郷に遊学すると同時にやめてしまつて、今日までついで絵筆を握る機会はなかつた。もと使つた絵の具箱やパレットや画架なども、数年前国の家を引き払う時に、もうこんなものはいるまいと言つて、自分の知らぬ間に、母がくず屋にやつてしまつたくらいである。

その後都へ出て洋画の展覧会を見たりする時には、どうかすると中学時代の事を思い出し、同時にあの絵の具の特有な臭気と当時かきながら口癖に鼻声で歌つたある唱歌とを思い出した、そうして再びこの享樂にふけりた

いという欲望がかなり強く刺激されるのであった。しかし自分の境遇は到底それだけの時間の余裕と落ち着いた気分を許してくれないので実行の見込みは少なかつた。ただ展覧会を見るたびにそういう望みを起こしてみるだけでも自分の単調な生活に多少の新鮮な風を入れるという効果はあつた。

中学時代には、油絵といえ、先生のかいたもの以外には石版色刷りの複製品しか見た事はなかつた。いつか英国人の宣教師の細君が旧城跡の公園でテントを張って幾日も写生していた事があつた。どんなものができてい

るかのぞいてみたくてこわごわ近づくと、十二三ぐらいの金髪の子供がやって来て「アマリ、ソバクルト犬クイツキマース」などと言った。実際そばには見た事もないような大きな犬がちゃんと番をしているのであった。

それから二十何年の間に自分はかなり多くの油絵に目をさらした。数からいえばおそろく莫大ばくだいなものであるろう。見ているうちに自分の目はだんだんにいろいろに変わって来た。そして芸術としての油絵というものに対する考えもいろいろにうつって行った。ただその間に不断にいだいていた希望はいつか一度は「自分のかいた絵」を見

たいという事であった。世界じゆうに名画の数がどれほどあつてもそれはかまわない。どんなに拙劣でもいいから、生まれてまだ見た事のない自分の油絵というものに対してみたいといふのであつた。

このような望みは起こつては消え起こつては消え十数年も続いて来た。それがことしの草木の芽立つと同時に強い力で復活した。そしてその望みを満足させる事が、同時に病余の今の仕事として適當であるといふ事に気がついた。

それでさつそく絵の具や筆や必要品を取りそろえて小

さなスケッチ板へ生まれて始めてのダツプレナチュールを試みる事になった。新しいパレットに押し出した絵の具のなまなましい光とにおいは強烈に昔の記憶を呼び起こさせた。長い筆の先に粘い絵の具をこねるときの特殊な触感もさらに強く二十余年前の印象を盛り返して、その当時の自分の室から庭の光景や、ほとんど忘れかかった人々の顔をまのあたりに見るような気がした。

まず手近な盆栽や菓子やコップなどと手当たり次第にかいてみた。始めのうちはうまいのかまずいのかそんな事はまるで問題にならなかつた。そういう比較的な言葉

に意味があるはずはなかった。画家の数は幾万人あつても自分は一人しかいないのであつた。

思うようにかけないのは事実であつた。そのかわり自分の思いがけもないようなものができてくるのもおもしろくない事はなかつた。とてもかけそうもないと思つたものが存外どうにか物になつたと思ふ事もあり、わけもないと思つたものがなかなかむつかしかったりした。それよりもおもしろいのは一色の壁や布の面からありとあらゆる色彩を見つけ出したり、静止していると思つた草の葉が動物のように動いているのに気がついたりするよ

うな事であった。そして絵をかいていない時でもこういう事に対して著しく敏感になって来るのに気がついた。寝ころんで本を読んでいると白いページの上に投じた指の影が、恐ろしく美しい純粋なコバルト色をして、そのかたわらに黄色い補色の隈くまを取っているのを見て驚いてしまつてそれきり読書を中止した事もある。またある時花壇の金蓮花きんれんかの葉を見ているうちに、曇つた空が破れて急に強い日光がさすと、たくさん丸い葉は見るまにすくすくと向きを変え、間隔と配置を変えて、我れ勝ちに少しでも多く日光をむさぼろうとするように見えた。一

つ一つの葉がそれぞれ意志のある動物のように思われて
なんだか恐ろしいような気もした。

手近な静物や庭の風景とやっっているうちに、かく物の
種がだんだんに少なくなってきた。ほんとうは同じ静物
でも風景でも排列や光線や見方をちがえればいくらでも
材料にならぬ事はないが、しろうと素人の初学者の自分としては、
少なくともひとあたりはいろいろちがった物がかいてみた
かった。いちばんかいてみたいのは野外の風景であるが
今の病体ではそれは断念するほかはなかった。それだと
うとう自画像でも始めねばならないようになって来た。

いっただい自分はどういふものか、従来肖像画というものにはあまり興味を感じないし、ことに人の自画像などには一種の原因不明な反感のようなものさえもっているのであるが、それにもかかわらずついに自分の顔でもかいてみる気になってしまった。

それである日鏡の前にすわって、自分の顔をつくづく見てみると、顔色が悪くて頬ほおがたるんで目から眉まゆのへんや口もとには名状のできない暗い不愉快な表情がただよっているのかいてみる勇気が一時になくなってしまった。そのうちにまた天気の良い気分のおりに小さ

な鏡を机の前に立てて見たら、その時は鏡の中の顔が晴れ晴れとしていて目もどことなく活気を帯びて、前とは別人のような感じがした。それでさっそくいちばん小さなボール板へ写生を始めた。鉛筆でザツト下図をかいてみたがなかなか似そうもなかった、しかしかまわず絵の具を付けているうちにまもなくともかくも人の顔らしいものができた。のみならずやはりいくらかは自分に似ているような気もした。顔の長さが二寸ぐらいで塗りつぶすべき面積が狭いだけに思ったよりは雑作ぞうさなく顔らしいものができた、と思つてちよつと愉快であつた。それで

さっそく家族に見せて回ると、似ているという者もあり、似ていないというものもあつた、無論これはどちらも正しいに相違なかつた。

この始めての自画像を描く時に氣のついたのは、鏡の中にある顔が自分の顔とは左右を取りちがえた別物であるという事である。これは物理学上からはきわめて明白な事であるが写生をしているうちに始めてその事実がほんとうに体験されるような氣がした。衣服の左前なくらいはいいとしても、また髪ほくろの毛のなでつけ方や黒子の位置が逆になつていくくらいはどうでもなるとしても、も

つと微細な、しかし重要な目の非対称や鼻の曲がりやそれを一々左右顛倒しててんとう考えるとという事は非常に困難な事である。要するに一面の鏡だけでは永久に自分の顔は見られないという事に気がついたのである。二枚の鏡を使って少し斜めに向いた顔を見る事はできるだろうがそれを実行するのはおつくうであつたし、また自分の技量で左右の相違をかき分ける事もできそうになかつた。そんな事を考えなくてもただ鏡に映つた顔をかけばいいと思つてやっているうちに着物の左ひだり衽おくみのところでもまたちよつと迷わされた。自分の科学と芸術とは見たままに描け

と命ずる一方で、なんだか絵として見た時に不自然ではないかという気もするし、年取った母がいやがるだろうと思っただので、とうとう右衽みぎおくみにごまかしてしまっただが、それでもやっぱり不愉快であつた。

この自画像 No. 1 は恐ろしくしわだらけのしかみ面づらで上目に正面をにらみつけていて、いかにも性急なかんしゃく持ちの人間らしく見えるが、考えてみると自分にもそういう資質がないとは言われない。

それから二三日たってまた第二号の自画像を前のと同大の板へかいてみた。今度は少し顔を斜めにしてやって

みると、前とは反対にたいへん温和な、のっぺりした、若々しい顔ができてしまった。妻や子供らはみんな若すぎると言って笑ったが母だけはこのほうがよく似ていると言った。母親の目に見える自分の影像と、子供らの見た自分の印象とには、事によったら十年以上も年齢の差があるかもしれない。それで思い出したが近ごろ自分の高等小学校時代に教わったきりで会わなかった先生がたの写真を見た時にちよつとそれと気がつかなかつた。写真の顔があまり若すぎて子供のよな気がしたからである。よくよく見ているとありありと三十年前の記憶が呼

び返された。これから考えるとわれわれの頭の中にある他人の顔は自分といっしょに、しかもちゃんときまった年齢の間隔を保存しつつだんだん年をとるのではあるまいか。

同じ自分が同じ自分の顔をかくつもりでやっている、と、その時々でこのようにいろいろな顔ができる、これはつまり写生が拙なためには相違ないがともかくもおもしろい事だと思った。No. 1にもNo. 2にもどこか自分に似たところがあるはずであるが、1と2を並べて比較してみると、どうしても別人のように見える。そうしてみる

と1と2がそれぞれ自分に似ているのは、顔の相似を決定すべき主要な本質的の点で似ているのでなくて第二義以下の枝葉の点で似ているに過ぎないだろうと思われる。

これについて思い出す不思議な事実がある。ある時電車で子供を一人連れた夫婦の向かい側に座を占めて無心にその二人の顔をながめていたが、もとより夫婦の顔は全くちがった顔で、普通の意味で少しも似たところはなかった。そのうちに子供の顔を注意して見るとその子は非常によく両親のいずれにも似ていた。父親のどこと母

親のどことを伝えているかという事は容易にわかりそうもなかったが、とにかく両親のまるでちがった顔が、この子供の顔の中で渾然こんぜんと融合してそれが一つの完全な独立なきわめて自然的な顔を構成しているのを見て非常に驚かされた。それよりも不思議な事は、子供の顔を注視して後に再び両親の顔を見比べると、始め全く違って見えた男女の顔が交互に似ているように思われて来た事である。このような現象を心理学者はどう説明するだろうか。たしかにおもしろい問題にはなるに相違ないと思っただ。それからまた一方では親子の関係というものの深刻

な意味を今さらのように考えたりした。もう一つ、これはK君の話だが、同君の友人の二男が、父親よりも生母よりもかえって、父の先妻、しかもなくなつた先妻にそっくりなので、始めて見たK君は、一種名状のできないシヨツクを感じたそうである。K君の認めた相似が全くオブジエクテイヴだとすると、現在の科学はこの説明を
持てあますだろうと思われる。

いったい二つの顔の似ると似ないを決定すべき要素の
ようなものはなんであろう。この要素を分析し抽出する
科学的の方法はないものだろうか。自分は自画像をかき

ながらいろんな事を考えてみた。同じ大きさに同じ向き
の像を何十枚もかいてみる。そしてそれを一枚一枚写真
にとって、そのおのおのを重ね合わせて重ね撮り^と写真を
こしらえる。もしおのおのの絵が実物とちがう「違い方」
が物理学などでいう誤差の方則に従っているいろに分配
せられるとすれば重ね撮りの結果はちょうど「平均」を
とる事になってそれが実物の写真と同じになりはしま
いか。もしそれが実物と違えばその相違は描き手に固有な
いわゆる *personal equation* を示すか、あるいはその人
の自分の顔に対する理想を暴露するかもしれない。それ

はとにかく何十枚の肖像をだいたい似ている度に応じて二つか三つぐらいの組に分類する。そうしてその一つ一つの写真を本物の写真と重ねてみてよく一致する点としない点とをいくつかの箇条に分かつて統計表をこしらえる。こんな方法でやれば「顔の相似」という不思議な現象を系統的に研究する一つの段階にはなりそうである。

自画像はNo. 2でしばらくやめてまた静物などをやっているうちに一日画家のT君が旅行から帰ったと言っておざわざ自分の絵を見に来てくれた。ありたけの絵をみんな出して見てもらっているいろいろの注意を受け、いろいろ

なおもしろい事を教わってたいへんに啓発されるような気がした。自画像の二枚については、あまり色が白すぎるといふのと、もっと細かに見て、色や調子を研究して根気よくかかなければいけないといふのであった。なるほどそう言われてみると自分のかいた顔は普通の油絵らしくなくて淡彩の日本画のように白っぽいものである。もつとも鏡が悪いために実際いくぶん顔色が白けて見えただには相違ないが、そう言われて後に鏡と絵と比べてみると画像のほうはたしかに色が薄くて透明に見えて、じょうぞく上簇期の蚕はだのような肌はだをしていた。そしていかにもぞ

んざいで薄っぺらなものに思われて来た。それからT君はいろいろの話の内にトーンというものの大切な話を話した。目を細くしてよく見きわめをつけてから一筆ごとに新しく絵の具を交ぜては置いて行くのだそうである。ある人は六尺もある筆の先へちよつと絵の具をくつつけて、鳥でも刺すようにして一点くつつけてはまたながめて考え込むというのである。この話を聞いているうちになんだか非常に愉快になって来た。そういう仕事をしている画家と、非常にデリケートな物理の実験をやつて敏感なねじをいじつてはめがねをのぞいている学者と全く

兄弟分のような気がしておもしろくなつて来た、そして
どういうわけか急におかしくなつて笑い出すとT君もい
つしよに笑い出してしまった。

それから二三日たつてT君の宅へ行つて同君の昔かい
た自画像を二枚見せてもらった。それは小さな板へかい
た習作であつたがなるほど濃厚な絵の具をベタベタとき
たならしいように盛り付けたものであつた。しかし自分
ののっぺりした絵と比べて見るとこのほうが比較になら
ぬほどいきいきしていてまっ黒な絵の具の底に熱い血が
通^{かよ}つていそいな気がした。

もつとも考えてみるとこのくらいの事は今始めて知ったわけではない。この自分の自画像がもし他人の絵であったとしたらおそろく始めからまるで問題にならないで打つちやっつてしまうほどつまらないものかもしれない。ただそれが自分のかいたのであるがためにこんなわかりきった事がわからないでいたのをT君の像をながめているうちにやっつとの事で明白に実認したに過ぎない。いたい自分は、多くの人々と同様に、自分の理解し得ないものを「つまらない」と名づけたり、自分と型のちがった人を「常識がない」と思ったりするような事がかなり

ありそうであるが、幸いにあるいは不幸にして、自分の絵を一つの単純な絵として見て黒人のくろうとと比較する時に、自分のほうがいいと思いうるほどの自信がないと見えて、T君の絵と説とにすっかり感心してしまった。そうして頭を新しく入れ換えて第三号の自画像に取りかかる事にした。

T君のすすめに従って今度はカンバスへやることにした。六号という大きさの画布を枠わくに張ったのを買って来た。同時に画架も買って来てこれに載せた。なんだかいよいよ本式になって来たと思うと少し気味の悪いような

気もしてすぐには手をつけられなかった。居間のすみの
箆^{たんす}笥のわきにある鏡台の前へすわって左から来る光に半
面を照らさせ、そして鏡に映っているものは画架でも背
後の箆^{たんす}笥でもその上にある本や新聞でも、見えるだけの
ものはみんなそのままにかいてみようと思っ^てやり始め
た。

今度はなるべく顔を大きくするつもりで下図を始めた
のであるが、どういうものか下図をかいているうちに思
ったより小さくなってしまった。自分が大きくしようと思
っているのに手と鉛筆とがそれを押え押えて顔を縮め

て行くようにも思われた。実物に近いほどに書くつもり
のがいつのまにか半分足らずぐらいのものになった。実
物と思つて見ているのが実は鏡の中の虚像で鏡より二倍
の距離にあるから視角はかなり小さくなつてゐる。それ
に画布のほうは手近にあるものだから、たとえ映像と絵
と同じ視角にしても寸法は実物の半分以下になるわけだ
と思われる。それにしても人が鏡を見て自分の顔という
ものの観念をこしらえているが、左右顛倒てんとうの事實は別と
して顔の大きさというものに対しても正当な観念を得る
事はおそらく非常に困難だろうと思われだした。つまり

われわれはほんとうの自分の顔というものは一生知らずに済むのだという気さえした。自分の事は顔さえわからないのだ。だれかが「自分の背中だけは一生触れられない」と言った事を思い出す。

下図をすっかり消してかき直すのもめんどうであったし、またこのくらいの大きさのも一枚あっていいと思つてそのまま進行する事にした。妻と長女とに下図を見せ、違った所を捜させるとじきにいろいんな誤りが発見された。他人が見ればそんなにたやすく見つかるような間違いが、かいている自分にはなかなかわからないのである。

った。

下図はとうとうあまりよく似ないまままで絵の具をつけ始めた。かいて行くうちによくなるだろうと思ったが、なかなかそう行かない事はあとでだんだんにわかって来た。

もちろん顔から塗り始めた。始めにだいたいの肉色と影をつけてしまった時には、似てはいないがたいへん感じのいいような顔ができたのでこれは調子がいいと思つて多少気乗りがして来た。そしてだんだんに細かく筆を使って似せるほうと色の調子とに気を配り始めるとそろ

そろむつかしくなる事が予覚されるようになって来た。

まず第一に困った事は局部局部を見て忠実に写しているといつのまにか局部相互の位置や権衡が乱れてしまう。右の目の格好を一生懸命にかいてだいたいよくなったと思つて少し離れて見るとその目だけが顔とは独立に横に脱線したりつり上がりねじれなどした。どうも右をかいている時と左をかいている時とで顔の傾斜が変わる癖があるらしかった。そのために左右の目は互いに自由行動をとつてどうしても一つの顔の中に融和しない、しかたがないからいづれか一方をきめてから他の一方を服従さ

せるほかはないと思つてまず比較的似ているらしい向かつて右の目を標準にする事に決めた、そして左をかく時は一生懸命に右との關係を考え考えかいて行つた。

コンパスや物差しを持って来て寸法の比例を取つたりしたが、鏡が使つてあるだけにこの仕事は静物などの場合のように簡単でない。なにしろほんとうの顔と鏡の顔と、ほんとうの物差しと鏡の中の物差しとこの四つのもこのうちの二つを比較するのだから時々頭の中が錯雑して比較すべき物を間違えたりする。それからもう一つ鏡のぐあいの悪い事は、静物などと同じつもりで、目を細

くして握った手のひらの穴からのぞくと、鏡の中の顔もそのとおりまねをするから結局目の近辺をかく時にはこの方法は無効になるのであった。

右の目を標準にしてだんだんに進行して行くうちにまもなく鼻から顔全体の輪郭まで大改造をやらなければならぬ事がわかって来たのでこれはたいへんだと思つた。顔全体がだいぶ傾斜しなければならぬ事になるらしい。それでは困るから結局かんじんの右の目をもう一ぺん打ちこわして、すっかり始めからやり直すほかはないと思うとはりつめた力が一時に抜けて絵筆を投げ出して

しまいたくなつた。ひとまず中止としてカンバスを室のすみへ立てかけて遠方からながめて見ると顔じゆう妙に引きつりゆがんで、始めに感じのよかつた目も恐ろしく険相な意地悪そうな光を放つてにらんでいるので、どうもそのままにしてあすまで置くのは堪えられないような気がした。それで、もうだいたいぶ肩が凝つて苦しくなつて来たけれども奮発して直し始めた。

それからほとんど毎朝起きて部屋へやの掃除そうじがすむとすぐにこの自画像 No. 3 に手を入れる。あまり凝りすぎてもからだにさわるから午前だけにしたいと思つたが、午前中

に一段片付けたつもりで昼飯を食いながらがめていると間違った所が目について気になりだす、もう一筆と思ううちにとうとう午後の時間が容赦なくたつてしまふ。

それでも少しずつは似てくるようであった。時としては描きながら近くで見ると非常によくなくて、ほとんどもう手をつける所がないような気がして愉快になる。しかし画架からはずして長押なげしの上に立てかけて下から見上げるるとまるで見違えるような変な顔になっているのでびっくりする。どうかすると片方の小鼻が途方もなくたれ下がっているのを手近で見る時には少しも気づかなかつ

たりする。

不思議な事にはこのように毎日見つめている絵の中の顔がだんだんに頭の中にしみ込んで来てそれがとにかく一人の生きた人間になって来る。それは自分のようでもあるしまた他人のようでもある。時としては絵の顔のほうがかほんとうの自分で鏡の中のがうそのような気がする。特に鏡と画面とから離れて空で考える時には、鏡の顔はいつでも影が薄くて絵の顔のほうが強い強い実在と なって頭の中に浮かんで来るのである。これではだめだ と思った。絵を見つめる時間をなるべく減じて鏡を見る

時を長くしなければいけないと思った。

絵の中にいる人間とかいている自分との間には知らず知らずの間に一種の同情のようなものが生じて来るような気がしだした。画像が口をゆがめて来ると、なんだか自分も口をゆがめなくてはいられなくなるようであった。自分が目を細くしていると画像もいつのまにかそうするように思われた。絵の顔が気持ちのいい日はなんだか愉快であるが、そうでない日は自分もきげんがよくなかった。

調子のごくごくいい日にはいいかげんに交ぜる絵の具

の色や調子がおもしろいようにうまくはまって行く。絵の具のほうですっかり合点がてんしてよろしくやってくれるのを、自分はただそこまで運んでくっつけてやっているだけのようない気がする。こんな時にはかなり無雑作むざうさに勢いよく筆をたたきつけるとおもしろいように目が生きて来たり頬ほおの肉が盛り上がりたりする。絵の具と筆が勝手気ままに絵をかいて行くのを自分はあっけに取られて見ているような気がするのである。こんな時には愉快に興奮する。庭を見ても家内の人々の顔を見ても愉快に見え、そうして不思議に腹がよくへって来る。

これに反してぐあいの悪い日は絵の具も筆も、申し合
わせて反逆を企て自分を悩ますように見える。色が濃す
ぎたと思つて直すときつと薄すぎる。直しているうちに
輪郭もくずれて来るし、一筆ごとに顔がだんだん無惨に
情けなく打ちこわされて行く。その時の心持ちはずいぶ
んいやなものである。早く中止すればいいと思わない事
はないが、そういう時に限つて未練が出てやめるに忍び
ない。ちようど来客でもあつてやむを得ず中止する時に
は、困つたという感じと、ちようどいい時に来てくれた
という考えとがいつしよになる。客が帰るとできそこな

った絵をすぐに見ないではいられない。

あまり自分が熱中しているものだから、家内のものは戯れに「この絵は魂がはいっているから夜中に抜け出すかもしれない」などと言って笑っていた。ところがある晩床の中にはいつて鴨居かもいにかけて自画像をながめていると、絵の顔が思いがけもなくまたたきをするような気がした。これはおもしろいと思つて見つめるとなんと面白い。しかし目をほかへ転じようとする瞬間にまたすばやくまたたくように見えた。これはたぶん有りがちな幻覚かもしれない。プーシキンの短編にもカルタのスペード

の女王がまたたきををする話があるが、とにかくわれわれの神経が特殊な状態に緊張されると、こんな錯覚が生じるものと見える。それよりも不思議な錯覚は、夜床の中で目をねむって闇やみの中を見つめるようにすると、そこに絵の顔が見えて来る事である。始めて気のついた時はハルシネーションのようにはつきり見えたが、その後はただぼんやり、しかしそれが画像の顔だという事がわかるくらいに現ナハビルドわれたり消えたりした。生理光学でよく研究されている残像ナハビルドという現象はあるが、それは通例実物を見つめた後きわめて少時間だけにとどまるし、また通

例陽像ポジチーフと陰像ネガチーフとが交互に起こるものである。このよう

に長時間の後に残存してしかも陽像のみ現われるというのはまだ読んだ事も聞いた事もなかった。おそらくこれは生理的ではなくて、病的に神経の異常から起こるハルシネーションの類だろうが、それにしても妙なものである。人殺しをしたものが長い年月の後に熱病でもわづらった時に殺した時の犠牲者の顔をありあり見るというが、それはおそらく自分の見た幻覚と類した程度のものが見えるのではあるまいかと思った。

もう一つ不思議な錯覚のようなものがあつた。ある日

例のように少しずつ目をいじり口元を直ししているうちに、かいている顔が不意に亡父の顔のように見えて来た。ちようど絵の中から思いがけもなく父の顔がのぞいていような気がして愕然^{がくぜん}として驚いた。しかし考えてみるとこれはあえて不思議な事はないらしい。自分はかなりに父によく似ていると言われている、自分はそうとは思わないがどこかによく似た点があるに相違ない。自分の顔のどこかを少しばかりどうか修正すれば父の顔に近よりやすい傾向があるのだらう。それで毎日いろいろに直したり変えたりしているうちには偶然その「どこか」に

うまくぶつかって、主要な鍵かぎに触れると同時に父の顔が一時に出現するのであろう。

それから考えてみるに自分が毎日筆のさきでいろいろさまさまの顔を出現させているうちには自分の見た事のない祖先のたれやその顔が時々そこからのぞいているのではないかという気がしだした。実際時々妙に見たよ
うな顔だという気のする事さえある。

人間の具体的な個々の記憶や経験はそのままに遺伝するものではないだろうが、それらを煎せんじつめた機微きびなる物が遺伝しているので、そのためにこのような心持ち

を起こさせるのではあるまいか。漱石先生の「趣味の遺伝」はまさにこういう点に触れたもののようにも思われる。ラフカディオ・ハーンの本いたものの中にもこのよ
うな考えが論じてあった。われわれの祖先を千年前にさ
かのぼると、今の自分というのはその昔の二千万人の血
を受け継いでいる勘定だそうである。そうしてみると自
分が毎日こしらえているいろいろの顔は、この二千万人
のどれかの顔に相当するかもしれぬ。こんな事を考え
ておかしくも思ったが、同時に「自分」というものの成
り立ちをこういう立場から、もう一度よく考えてみなけ

ればならないと思った。なんだか独立な自分というものは微塵みじんに崩壊ほうかいしてしまつて、ただ無数の過去の精霊が五体の細胞と血球の中にうごめいているという事になりそうであつた。

この第三号の自画像はまずどうにか、こうにか仕上げてしまった。ほんとうの意味ではいつまでかかっても「仕上がる」見込みのない事がわかつて来たから、ここらでまず一段落ついた事にしてしばらく放置たんすしてみる事にした。バックに緑色の布のかかった箆たんすがあつて、その上に書物や新聞の雑然と置いてあるのがいかにもうるさく

て絵全体を俗悪にってしまうから、あとからすっかり塗りつぶしてそのかわりに暗緑色の幕をたれたようなぐあい直してみた。そうしたら顔が急に引き立って浮き上がって来た。のみならずそれまでは雑誌の口絵にでもありそうな感じのあった絵が、この改造のためにいくらか落ちついた古典的といったような趣を生じた。そして色の対照の効果で顔の色の赤みが強められるのであった。しかしまた同時に着物がやはり赤っぽく見えだして気に入らなくなったが、もうそれを直すだけの根気がなくなっただけのままにしてしまった。

すぐに第四号の自画像を同大の画布にやり始める事にした。今度はずっと顔を大きくしてそして前よりも細かく調子を分析してやってみようと思った。ところが下図をかき始めにはかなり大きくかいたのが、目や鼻を直し直ししているうちに知らず知らずだんだんに顔が縮小して行くのが実に不思議であった。だいたいできたところに寸法をとってみるとやっとな実物の四分の三ぐらいのものになっていている事がわかった。それをもう一度すっかり消してやり直す勇気がなかったから今度もまたそのままやり続けた。

最初の日は影と日向ひなたとを思い切って強く区別してだいたいの見当をつけてみた。その時にできた顔は不思議に前の第三号の顔に似ていた。何かしら自分の頭の奥にこびりついた誤謬ごびゆうが強い力で存在を主張していると見える。

この絵はとうとう二十日はつか余りいじり回したが、結局やはり物にならないで中止してしまわねばならなかった。顔の面積が大きくなっただけに困難は前よりもいっそう大きかった。局部にとらわれて全体の権衡を見失う事もいよいよ多かった。セザンヌが「わかりますか、ヴオラ

ール君。輪郭線が見る人から逃げる」と言ったほんとうの意味はよくはわからぬが、全くそういったような気のある事がしばしばあった。右の頬ほおをつかまえたと思う間に左の頬はずるずる逃げ出した。ずっと前にいつかある画家が肖像をかいているのを見た事がある。その時に画家の挙動を注意していると素人しらうとの自分には了解のできないような事がいろいろあった、たとえば肖像の顚あごの先端をそろそろ塗っていると思うとまるで電光のように不意に筆が瞼まぶたに飛んで行ったりした。油断もすきもならないといったふうにも目を光らせて筆をあちらこちらと飛ば

せていた。羊の群れを守る番犬がぐるぐる駆け回って、列を離れようとする羊を追い込むような様子があった。

今になって考えてみるとあれはやはり輪郭線や色彩が逃げよう逃げようとするのを見張っていたのだと思われる。こういうふうにはやらなければならないとなかなかたいへんだと思った。

実際輪郭線がわずかに一ミリだけどちらかへずれても顔の格好がまるで変わってしまうのは恐ろしいようであった。ある場所につける一点の絵の具が濃すぎても薄すぎても顔がいびつに見えた。そのような効果は絵に接近

して見ていてはかえってわからなくて少し離れて見ると著しく見えた。六尺の筆を使う意味が少しわかりかけたのである。

どうにか顔らしいものができた時にはそれが奇妙にも自分の知っている某○学者によく似ていた。そうとも知らず家内のある者がこの絵を見て「大工か左官のような顔だ」といった。

それから毎日いろいろと直して変化させている間に、いつのまにかまたこの同じ大工の顔がひょっくり復帰して来るのが不思議であった。会いたくないと思つてつと

めて避けている人に偶然出くわすような気がしばしばした。ある日思い切って左の頬ほおをうんと切り落としてから後はこの不思議な幽霊に脅かされる事は二度となくなつた。

いつまでやってもついにできあがる見込みはなさそうに思われだした。ある日K君にこのごろ得たいろいろの経験を話しているうちに同君が次のような事を注意した。「いったい人間の顔は時々刻々に変化しているのがある瞬間の相だけつかまえる事は第一困難でもあるし、かりにそれを捕えて表現したとしても、それはその人の

像と言われるだろうか」というような意味であった。そういうふうなふうに考えてみると、単に早取り写真のようなものならば技巧の長い習練によって仕上げられうるものかもしれないが、ある一人の生きた人間の表現としての肖像は結局できあがるといふ事はないものだとも思われた。あるいはその点に行くとかえって日本画の似顔とかあるいは漫画のカリカチュアのほうが見込みがありそうに思われた。それほどではなくてもまつ毛一本も見残さずかいた、金属製の顔にエナメルを塗ったような堅い堅い肖像よりは、後期印象派以後の妙な顔のほうが少なく

もねらい所だけはほんとうであるまいかと思われてくる。この考えをだんだんに推し広げて行くと自然に立体派や未来派などの主張や理論に落ちて行くのではあるまいか。

仕上がるという事のない自然の対象を捕えて絵を仕上げるといふ事ができるとすれば、そこには何か手品の種がある。いったい顔ばかりでなく、静物でもなんでも、あまり輪郭をはっきりかくと絵が堅すぎてかえって実感がなくなるようである。たとえばのうぜん葉を一枚一枚はつきりかいてみると、どうもブリキ細工にペンキを

塗ったような感じがする。これは自分の技巧の拙なためかと思うが、しかし存外大家の描いたのでもそんなのがありやすい。これに反してわざと輪郭をくずして描くと生気が出て来て運動や遠近を暗示する。これはたしかに科学的にも割合簡単に説明のできる心理的現象であると思つた。同時に普通の意味でのデッサンの誤謬ごびゆうや、不器用不細工というようなものが絵画に必要な要素だという議論にやや確かな根拠が見つかりそうな気がする。手品の種はここにかくれていそうである。

セザンヌはやはりこの手品の種を搜した人らしい。し

かしベルナールに言わせると彼の理論と目的とが矛盾していたために生涯仕上げがしょうがいできなかつたというのである。それにしてもセザンヌが同じ「静物」に百回も対したという心持ちがどうも自分にはわかりかねていたが、どうしてもできあがらぬ自分の自画像をかいているうちにふとこんな事を考えた。思うにセザンヌには一つ一つの「りんごの顔」がはっきり見えたに相違ない。自分の知った人の中には雀すずめの顔も見分ける人はあるが、それよりもいつそう鋭いこの画家の目には生きた個々のくだものの生きた顔が逃げて回って困ったのではあるまい

か。その結果があのかげばったりんごになったのではあるまいか。

こんなさまさまの事を考えながら、毎日熱心に顔を見つめてはかいていると、自分の顔のみならず、だれでも対している人の顔が一つの立体でなくて画布に表われた絵のように見えて来た。人と対話している時に顔の陰影と光が気になって困った。ある夜顔色の美しい女客の顔を電燈の光でしみじみ見ていると頬ほおや額の明るい所がどうしてもまだかわかぬ生の絵の具をべっとり盛り上げたような気がしてしかたがなかった、そしてその光った所

が顔の運動につれていろいろに変わるのを見とれているうちに、相手の話の筋道を取りはずしそうになる事が一度ならずあった。その後、ある日K君と青山の墓地を散歩しながら、若葉の輝く樹冠の色彩を注意して見ているうちに、この事を思い出して話すと、K君は次のような話をしてくれた。ゴンクールの小説に、ある女優が舞台を退いて某貴族と結婚したが、再びもとの生活が恋しくなるというのがある。その最後の条に、夫が病気で非常な苦悶くもんををするのを見たすぐあとで、しかも夫の眼前で鏡へ向かってその動作の復習をやる場面がある。夫がそ

れを見てお前は芸術家だ、恋はできないと言って突きとばすのでおしまいになっている。K君はこれを読んだ時にあまりに不自然だと思つたが、自分の今の話を聞くとそんな事もないとは限らないような気がすると言つた。

このような特殊な場合だけ考えると、實際世間で純粹な芸術が人倫にはいたいてき廢頹的効果を与えると云つて攻撃する人たちのいう事も無理でないと思われて来る。しかしさういう不倫な芸術家の与える芸術その物は必ずしも効果の悪いものばかりとは思われない。つまり、こういう芸術家やこれとよく似た科学者らは、極端なイーゴイストであ

るがために結果においてはかえって多数のために自分を犠牲にする事になる場合もあるだろう。そういう時にいつでも結局いちばん得をするのは、こういう犠牲者の死^し屍^しにむちうつパリサイあたりの学者と僧侶^{そうりよ}たちかもしれない。こんな事を考えているうちに、それなら金もうけに熱中して義理を欠く人はどうかという問題にぶつかって少しむつかしくなってきた。

毎日同じ顔をいじり回しているうちに時々は要領にうまくぶつかる事もあった。なんだか違っているには相違ないが、どう違っているかわからないで困っていたよう

な所が、何かの拍子にうまく直って来る時には妙な心持ちがした。楽器の弦の調子を合わせて行ってびったりと合ったような、あるいははまりにくい器械のねじがやっとはまった時のような、なんとという事なしに肩の凝りがすうっと解けるような気がするものである。

そういうふうによく行った所はもう二度といじるのが恐ろしくなる。それをかまわず筆をつける時にはかなりヒロイックな気持ちになる。しかしそれをやるときにと手が堅くなっていじけて、失敗する場合が多い。進歩という事にさえかまわなければ手をつけないでそのまま

に安んじておくほうがいわゆる処生の方法とも暗合して安全であるかもしれない。

それで自画像第四号もとうとう仕上げずにやめてしまった。第三号は第一号のように意地の悪い顔であったがこの第四号は第二号のように温厚らしくできた。二重人格者の甲乙の性格が交代で現われるような気がした。

今度は横顔でもやってみようと思つて鏡を二つ出して真横から輪郭を写してみたら実に意外な顔であつた。第一鼻が思っていたよりもずっと高くいかにも憎々しいように突き出っていて、額がそげてあご顎がこけて、おまけに後

頭部が飛び出していてなんとも言われぬ妙な顔であった、どこかロベスピールに似ているような気がした。とにかく正面の自分と横顔の自分を結びつけるのがちよつと困難に思われた。かつて写真屋のアルバムで知らぬ人の顔について同じような経験をした事はあつたが、生まれて四十余年来自分の肩の上についている顔についてこんな経験をしようとは思わなかつた。

これから思うと刑事巡査が正面の写真によつて罪人を物色するような場合には、目前にいる横顔の当人を平気で見のがすプロバビリテイもかなりにありそうだと思つ

た。場合によつては抽象的な人相書きによつたほうがかえつて安全かもしれない。あるいはむしろ漫画家のかいた鳥羽とば絵えがいちばん有効かもしれない。上手じょうずなカリカチュアは実物よりも以上に実物の全体を現わしているから。

これと連関して自分が前からいだいている疑問は、人間の顔が往々動物に似たり、反対に動物の顔がある人か、思い出させる事である。實際らくだに似た人やペリカンに似た人がある。ふぐ、きす、かまきり、たつの落とし子などに似た人さえある。古いストランド雑誌にいろん

な動物の色写真をうまくいろいろの人間に見立てたのがあつた。ある外国人は日本の相撲すもうの顔を見ると必ず何かの動物を思い出すと言つたが、その人の顔自身がどうも何かの獣に似ているのであつた。レヴィンのかいたトルストイの顔などはどうしても獅子ししの顔である。

そうしてみるとわれわれが人の顔を見る時に頭の中へできる像は決してユークリッド幾何学的のものではないと思われる。ただある、割合に少数な項目の、多数な

錯列パームユテーションによつていろいろの顔の印象ができてゐる。

その中に若干「相似」を決定するためには主要な項目の組

み合わせがあつてこれだけが具備すれば残りの排列などはどうでもいいのだろう。この主要の組み合わせを分析するということはかなりおもしろいしかしむつかしい問題だろうと思つたりした。渾天こんてんに散布された星の位置を覚えるのに、星の間を適当に直線で連ねていろいろの星座をこしらえる。それを一度覚えてしまえばいつ見てもそれだけの星がまとまって見えるし、これとだいたいに似た点の排列を見ればそれが実際にはかなりいびつになつていてもすぐにそれと認められる。われわれの顔に対する記憶もこれと似たものではあるまいか。星座の連結法

はむしろ任意的だが顔の場合にはそれが必然的である。すべての人間に共通であるとすればこれも一つの不思議な問題になる。

いろいろの「学」と名のつく学問、ことに精神的方面に關したもので、事物の眞を探究するとは言うものの、よく考えてみると物の本来の面目はやはりわからないで、つまりは一種の人相書きか鳥羽とばえ絵をかいている場合も多いように思われるが、そのような不完全な「像」が非常に人間に役に立って今日の文明を築き上げたと思うと妙な気持ちができる。ただ甲乙二人の描いた人相書きが

ちがう場合にどっちも自分のかいたほうが「正しい」と言つて、主張するのはいいとしてもおしまひにはにがにがしいけんかになるのはどんなものだろう。物理学では相対原理の認められた世の中であるのに。

横顔はとにかく中止として今度はスケッチ板へ一気呵成せいに正面像をやつてみる事にした。二十日はつか間苦しんだあとだから少し気を変えてみたいと思つたのである。今度は似ようが似まいがどうでもいいというくらいの心持ちで放胆にやり始めてただ二日で顔だけはものにしてしまった。ところがかえつてこのほうがいちばん顔が生きて

いてそしていちばん芸術的に見えた。その上これが今までのうちで最もよく似ているという者もあった。なんだかあまりあっけなくて、前の絵にいつまでもかじりついていたのがばかばかしいような気がしたが、実はやはり前の絵で得た経験の効果がこのスケッチに現われたかもしれない。

第一号から最後の五号までならべて見ると、ずいぶんいろいろな顔である。そしていずれも偶然の産物である。この偶然の行列の中から必然をつかまえるのは容易な事ではないと思った。すべてに共通なのは目が二つあると

かというような抽象的な点ばかりかもしれない。もっとも顔自身の日々の相が偶然のもものではあるうが。

毎日変わっている顔の歴史を順々にたぐって行けば赤ん坊の時まで一つの「連続」コンチニウムを作っているが、これを間断なく見守っていない他人に向かつて子供の時の顔と今の顔とを切り離して見せてそれが同人だという事を科学的理論的に証明しようとしたらずいぶん困難な事だろう。何十年来一つ家に暮らした親にでも、自分がある夜中に突然入れ換わったものでないという事を「証明」しなければならぬとしたら困るだろう。第一自分自身に

さえ子供の時と今との連鎖を完全に握っている人はあり
そうもない。こんな「証明」の必要はめったに起こらな
いから安心していているだけである。しかしたとえば生まれ
たばかりで別れて三年後に会った自分の子供を厳密な意
味で確認しうる人があるだろうか。しあわせな事には世
の中では論理的の証明はわりに要求されないで、オーソ
リティの証言が代用されそのおかげで物事が渋滞なく進
捗ちよくするのであろう。

自画像をかきながら思うようにかけない苦しきまぎれ

に、ずいぶんいろんな事を考えたものである。それをも
う一ぺん復習するようなつもりで書いてみるとずいぶん
くだらない事を考えたものだと思う事もあるが、また中
にはもう少し深く立ち入って考えてみたいと思う事もな
いではない。

(大正九年九月、中央公論)

日本文学電子図書館

「寺田寅彦随筆集 第1巻」

著者：寺田寅彦

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店

昭和45年8月20日 第38刷発行



日本文学電子図書館